

カリフォルニア大学バークレー校蔵三条西家旧蔵和歌詠草解説と翻刻(一)

—三条西実教詠草—

海野圭介
大山和哉
来山佳純

*キーワード

一 三条西家旧蔵の和歌詠草類

国文学研究資料館が推進している大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」による国際共同研究「UCバークレー校所蔵古典籍資料のインスタレーション・キュレーション」(代表者: ジョナサン・ズイツカー(カリフォルニア大学バークレー校)、研究期間二〇一八〜二〇二〇年)の研究の一環として、三カ年をかけて同校C・Vスター東アジア図書館所蔵の三条西家伝来の和歌関係資料の調査と検討を継続している¹⁾。その成果については、将来的にはweb上で活用できる形での提供を考えているが、そうした

提供とともに全体の概要が把握できるよう翻刻を一覧する形のデータ提供も行いたく考えている。本稿では同研究の調査と検討の成果の一部として、三条西実教によつて作成された和歌詠草の解説と翻刻を行いたい。

C・Vスター東アジア図書館に所蔵される日本の古典籍の由来と全体像については、長谷川強・渡辺守邦・伊井春樹・日野龍夫・小倉親雄「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」(『調査研究報告』五、一九八四年三月)、及び、岡雅彦・戸沢幾子・石松久幸・児玉史子「カリフォルニア大学バークレー校所蔵 三井文庫旧蔵江戸版本書目」(ゆまに書房、一九九〇年)に詳しい²⁾。カリフォルニア大学バークレー校(以下、「UCB」と記す)に移管された三井家旧蔵本の中に三条西家に由来する詠草や聞書などの和歌関係の資料が含まれていることは、早くから

知られていた^③。また、早稲田大学図書館にも三条西家に伝来した和歌関係資料が纏まって所蔵されており、この両者がともに根幹を同じくするものであることも知られている。実際、両所に所蔵される和歌詠草を引き比べてみると、その伝存は次の表の様になり、元来一連の営みの記録として所蔵された資料群が分置されたであろうことが理解される（詠草の数量は、前掲「カリフォルニア大学バークレー校田三井文庫写本目録稿」及び、古典籍総合データベース（早稲田大学図書館）による）。

歴代	名前（生没年）	UCBC・V スター東アジア図書館	早稲田大学図書館
3	実連（二四四二―一五八）	―	詠草留2巻
4	実隆（二四五五―一五三七）	―	―
5	公条（二四八七―一五六三）	―	―
6	実枝（二五一―一七九）	―	―
7	公国（二五五六―一八七）	―	―
8	実条（二五七五―一六四〇）	詠草留12冊	146通

9	公勝（二五九七―一六二六）	―	―
10	実教（二六一九―一七〇二）	61通	8通
11	公福（二六九七―一七四五）	860通	28通
12	実称（二七二七―一九二）	1308通	32通
13	公里（二七四九―一六五）	―	―
14	延季（二七五〇―一八〇〇）	587通	9通
15	実勲（二七八五―一八四五）	165通	11通
16	季知（二八一―一八〇）	384通	6通

三条西家第三代・実連の詠草の写しが偶発的に遺されているのを除けば、第四代・実隆から第七代・公国までの室町時代後期の当主四代の纏まった詠草は両所には確認できない。

第八代・実条の詠草は、早稲田大学図書館に比較的纏まって伝わり、一部がC・Vスター東アジア図書館にも伝わる。

第九代・公勝の詠草は両所に確認できないが、第七代・公国とともに公勝は早世であり、元来の資料自体が纏められることがなかったのかもしれない。また、第一三代・公里の詠草がやはり確認できないことも同様の事情によるのかもしれない。

第九代・公勝、第一三代・公里を除く、第一〇代・実教から第二二代・実称、第一四代・延季から第一六代・季知といった江戸時代の歴代当主の詠草は、UCBに大量に纏まって保管されていて、一部が早稲田大学図書館に伝わる。

早稲田大学図書館に実教以下の歴代の詠草が少数伝わるのは、元來が他の資料に混入していたものか、何らかの事情でUCBへの移管の前に一部を抜き出したといった理由が想定されるように思われる。

実条の詠草については、注3に記した論考のほか、すでに幾つかの検討が備わるが、他の歴代については資料の分析や記された和歌の表現についての具体的な検討は行われていない。本稿では、三条西家旧蔵和歌詠草と三条西家歴代の和歌表現を考えるための基礎資料として、実教の詠草を翻刻し、その詠作の概要について報告を行いたい。

二 三条西実教について

三条西実教は元和五年（一六一九）七月五日生、元禄一四年（一七〇一）十月十九日没。八十三歳。元和八年十二月二十八日叙爵。参議、権中納言を経て、承応四年（一六五五）権大納言正二位。

三条西家は実隆以来の古今伝授を継承する歌道の家であり、実教は後水尾院（一五九六―一六八〇）歌壇の重鎮の一人であった祖父実条（一五七五―一六四〇）より歌学を継承している。このことについては「桂光院殿も中院も幽斎より被聞たる也。これ皆当家より出たる也。此方、本也」（三条西実教述・正親町実豊記『和歌聞書』）と述べていることなどから、実教も歌道の家の継承者としての自負があったようである。後水尾院歌壇においても寛永八年（一六三一）二月二十二日の仙洞水無瀬宮法楽御会以来、御会への詠進を行っている。

歌道に關係した実教の逸話や言説は多い。例えば飛鳥井雅章述・心月亭孝賀記『尊師聞書』は次のように伝える。

西殿はしらぬ事ながらほめ給ふかたもあるべしと也。法皇の御うたさへ御氣にいらぬと西殿は仰らるゝと也。

実教の歌は公家の中でも高く評価されることがあったという。また、後水尾院の御製でさえ、氣に入らない時にはそのように口にしたとも伝える。

また、中院通茂述・松井幸隆記『溪雲問答』には次のようにある。

仙洞の御歌、三条西実教へ御談合の時、公音御使也。さるにより実教卿の批判の趣、故実共聞覚えておはします。仙洞にて仰の趣をも承り、御詠草拝見し、この御製にはいかなる実教も批は入らるま

じきと思ひて持参さるゝに、実教卿拝見して一返吟ぜられるゝ内(マヤ)に、あしき所、はや聞えけると也。是又真静物語なり。

ある時靈元院が御製について実教に相談した際、使いを務めていた押小路公音(一六五〇—一七一六、実教の弟にあたる)は、いかにあの実教でも今回の御製に批難を加えることはできまい、と思つていた。しかし御製の詠草を実教が手にして読み上げただけで、公音はすぐにその難点に気付いたという。実教は即座に靈元院の御製の未熟な点を見抜き、それが読み上げる声にも表れたのである。

このように、実教は歌道において評価された人物であつた。また後水尾院や靈元院の御製であつてもおもねることなく、自身の和歌観に照らし合わせて正直に意見を述べるという率直さ、あるいは大胆さが実教にはあつた。

こうした実教の気性は、結果的に自身の不遇を招くこととなる。寛文年間に靈元天皇の勘気に触れ、実教は蟄居を命じられることとなるのである(市野千鶴子「三条西実教の蟄居をめぐる」『書陵部紀要』第四六号、一九九四年)。実際に、寛文六年(一六六六)六月二十五日を最後に御会への詠進は途絶え、寛文九年以降は和歌奉行を勤めることもなくなつている(坂内泰子「三条西実教と後水尾院歌壇」(長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書院、一九九七年)。古今伝授の道統も子に引き継がれることなく絶えてしまい、歌道の家としての三条西家はその格を失つてしまふこととなつた。

つまり、実教の公的な詠進記録は寛永年間から寛文年間のものであり、その人生においてもこの頃が最も歌道に熱心な時期であつたと考えられる。カリフォルニア大学バークレー校三井文庫蔵『実教詠草』(八四四、八四五)には、年次の分かるもので寛永六年から寛永二十一年、実教十一歳から二十六歳までの詠歌が残されており、青年期の実教の活動を知る重要な資料である。

三 『実教詠草』とその表現

『実教詠草』は折詠草三十六通(八四四)と二十五通(八四五)に分かれており、禁裏御会や三条西家の月次会などの折のものである。添削や推敲の跡を残すものが多く、実教が歌道修練を重ねる様を窺うことができる。端書には「寛永十四六月十一日家月次之会兼日 出題祖父」(八四四)「七」、「祖父」は実条、「寛永十八二公宴御月次 中院大納言談合」(八四五)「一四」、「中院大納言」は中院通村)などであり、実教の詠歌活動に関わつた人物についても知られる。

当該資料に見られる実教歌の特徴として、例えば、

吹つたへきて(【八四四】「七」)

くたけちりゆく(【八四四】「八」)

折ならへつゝ(【八四四】「一六」)

もとめよりつゝ(【八四四】「一七」)

といった複合動詞の使用が挙げられる。やや詰まった印象を与える詞統きであるが、こうした詠み方によって新たな表現を見出す契機を探っていたようにも感じられる。

みなれみなるゝ〔八四四〕〔八〕

さく梅の匂ひもさむき〔八四五〕〔三〕

といった歌例の稀な表現にも趣向を凝らそうとする意図が窺える。また字余りの句が多く、例えば初句に限ってみても、

宮の内は〔八四四〕〔二六〕

おもひよらぬ〔八四五〕〔二〕

秋もあれと〔八四五〕〔一四〕

春もくるゝ〔八四五〕〔一五〕

いつのためと〔八四五〕〔一八〕

など散見し、旧来の詞にとられない句作りがなされている。ただし全体としては、用いる詞が二条派の枠組みから大きく外れていたというわけではない。一首をいかに仕立てるかという狙いに応じて、柔軟に表現を工夫していたと言えるだろう。

ところで、先の『尊師聞書』の引用箇所には、次の文章が続く。

たれがきゝても法皇の御歌はめでたかるべし。たとへばをそれある事なれど、法皇の御歌は白き羽二重のくまなきうちきをみるごとく潔白なり。西殿の御歌はよこれめもみえぬ黒羽二重のごとくなるべしと也。

後水尾院の御製を「白き羽二重」とするならば、実教の歌は「黒羽二重」であるという比喻について、雅章の真意は明確にできないものの、後水尾院の和歌が二条派風のなだらかで平穩優美なものであるのに対し、実教の和歌は上述のように、時に斬新な表現を用いながらも趣向を的確に実現していくものである、といった対照性を示したのではないだろうか。『実教詠草』は、こうして数々に残る実教の逸話や言説とも照らし合わせることで、歌人としての実教を精確に把握することを可能にする貴重な資料である。

〔注〕

(1) カリフォルニア大学バークレー校C・Vスター東アジア図書館の所蔵する歴史的典籍の一部、七六〇点については、同図書館との協定のもとすでにその全文画像データを、当館が運用する「新日本古典籍総合データベース」(<https://kotenseki.nijl.ac.jp>)から公開している(公開作品のリストは http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuuzyuu_list/list_berkeleymitsui.html)。

(2) 同論文には、カリフォルニア大学バークレー校に所蔵される日本古

典籍の中核をなす旧三井文庫本の管理に関わった人々との交流や米國への送付の由来などについても触れられており、昭和五八年（一九八三）という在外資料の総合的調査自体が殆ど行われていなかった時期の調査概要を知る記録としても貴重である。

(3) 井上宗雄「三条西実条の詠草について」（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院、一九九七年）等。

(4) 井上宗雄・柴田光彦「早稲田大学図書館蔵 三条西家旧蔵文学書目録」（『国文学研究』三二、一九六五年一〇月）。

(5) 高梨素子『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（おうふう、二〇一〇年）、大山和哉「三条西実条和歌詠草に見る表現の模索」（『国語国文』八三―八、二〇一四年八月）等。

(6) 以下、『和歌聞書』『尊師聞書』『溪雲問答』の本文は『近世歌学集成』上（明治書院、一九九七年）による。

〔付記〕

本稿は、文部科学省大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（実施主体・国文学研究資料館、計画期間二〇一四年度～二〇二三年度）による国際共同研究「UCパークレー校所蔵古典籍資料のインスタレーション・キュレーション」（代表者・ジョナサン・ズイツカー（カリフォルニア大学パークレー校）、研究期間二〇一八～二〇二〇年）による研究成果の一部である（三条西家旧蔵資料に関する研究の担当者は、マルラ俊江（UCB C・Vスター

東アジア図書館）、大山和哉（同志社大学）、盛田帝子（大手前大学）、海野圭介（国文学研究資料館）。

本資料の翻刻は、来山佳純が素稿を作成し、大山和哉、海野圭介が確認を行った。また、三条西家旧蔵の和歌詠草類の概要については海野が、三条西実条及びその詠草の表現についての解説は大山が担当した。

末尾ではございますが、貴重な資料の調査と研究にご助力を賜りました、UCB C・Vスター東アジア図書館、及び同図書館日本担当司書マルラ俊江氏に感謝申し上げます。

〔凡例〕

- ・すべての詠草について、その冒頭に「」によって通し番号を付した。
- ・行配りは資料の通りとした。
- ・旧字は通行の字体に改めた。
- ・歌に付された合点は\によって示した。
- ・ミセケチ部分は左傍点、によって示した。
- ・懐紙はいずれも折詠草であり、裏へ続く場合には表の末尾に「」を付した。
- ・破損や墨による抹消のため判読できない部分は●を用いて示した。

〔翻刻〕

【資料番号 八四四】

「一」

寛永十三十二月六日 月次兼日哥

実教

老少送年

＼玉の緒のなかきためしを老のもわかきも

送ゆくるとしに万代かけて

契行することの葉

かさならん数を鶴亀に

まかせをきて人といふ人の

をくる年なみ

しるへして越行老の

跡よりはかさぬる年の

道千世をたかそやへんとらし

老鶴よやは子も又

末とをくかそふるとしは」

千世の数かも

「二」

寛永十四

実教

牡丹

ふかみ草たねをあまたに

咲みちて花色をあらそふ

色花もめつらし

さく花をのつからも玉のみきりの

ふかみ草めくみの露もや

わきてをくらむ

「三」

寛永十四

実教

九月十三夜

＼今夜月は今夜又名におふも又名におふ月の

かひなしや曇りくもははてぬ

春にをならひて

くまなしとみる程もなく

長月の名におふ月に

かゝる雲かな

「四」

寛永十四二月六日〇家之●●当座

実教

紅葉

露しくれふかき方より

木々の色をまつ紅葉々に

染わた〇すらん

立まじる常盤木よりや

うすき色も猶千しほをそへてみ〇る

庭の紅葉々

〔五〕

寛永十四五月六日家月次〇会兼日、●●●出題祖父、

講師頭弁共綱朝臣、読師ナシ、予カ哥竹門御所望ニヨリ

二返也。

実教

袖上菖蒲

今日もなをかけしあやめを

すてやらて匂こほる、ひをつうつすいむ

袖のうへかな

なかき根のたえぬためしにを

引とりて袖にもかくる

あやめあかも成らん

〔六〕

寛永十四九月

実教

紅葉

奥山は染つくしてや牛も

申本れや
しとくれとどしとすき都の

むら雨の都の木々は

初しほにして

の物箱
木々にしむ木々

過てゆく立覧

陰高くき梢はのこる

松すきにおほはふ紅葉の

色の〇ふかそとひとゆるく

〔七〕

寛永十四六月十一日家月次之会兼日

出題祖父

実教

松高風有一声秋

秋をまつ吹つたへきて

松陰はに涼しさつきぬ

風のをとなかも

すしくて秋をおほゆる

夕風に日くらしもきく

庭の松かけ

夏なとてなも秋とやいはん

松陰には日影ももらぬて

風のすししさ

〔八〕

寛永十四十一月六日家月次当座、祖父出題、

●●●巻頭竹門、探題ニヨリ軸差別なし。

実教

水鳥知主

立たつよれとさはきもやらて

池のをしの汀にちかく

なれて鳴なり

さしめくる棹にもさすか

おとろかてみなれみなるゝ

池の水鳥

橋上霰

そのまゝに残る霰の色玉

もなくなくとけちりゆく

谷の岩橋

むす苔の色はかりなる

ふるはしにちるや霰れとは

音を忘るゝ

神楽

神垣にうたふ櫛の

こゑそへて夜ふかく

松の風も吹なり

うちしめる庭火の影もに

霜ふかき夜半をもしらするゝ

森の下陰

「九」

寛永十五々廿四、禁御当座、頭中将隆量

名代也。春曉者主被読之。

夏朝

明やすき夜のうらみは

はれゝてすゝしく残る

月の朝風

今朝のあさけ露こほれつゝ

茂あふ青葉を分る

風のすゝしさ

「一〇」

寛永十五七七禁御会

実教

代牛女述懐

神の代の契りをきし道たすててやふかき

今も世をの秋をに名をたかき

星合をの空をふりせぬ

なへて世の手向を

吹へたてなく風をもつたへよ

ほしあひ天の川風の空

七夕はちきりふりせて

物ことにうつり行世のかはり

秋に名たかきかはる此

「一一」

実教

野径霞

踏わくる雪もむもれて春は先た
霞におほふ野へのとけさ

深山花

外のちる後を、時なる契とて契て奥山は
山ふかくさく花の色哉色なれや

暮春雨

降くらす雨にかこたんしたひえぬ世行のしたふ

春の名残にぬちす袖をも降くらす

暁郭公

明やらぬ山郭公をのれより横雲の

わかれて出る横雲の空次二

水辺草

しけりあふ池の汀の夏草は
いはほの苔の色をそへつゝ

秋夕露

夕露の草木にもろき色までも

秋の哀の外にやはある

聞擣衣

夢絶し恨みわするゝ枕には
さすか友なる衣うつこゑ

庭紅葉

しくれゆく雫も染る一枝は
先千しほなる軒の紅葉々先たつ

冬夜月

をきあへぬ真砂の上に影そへて霜の色
霜よの月の更る寒けさ影さす

杜間雪

朽はてぬ落葉はうつみ冬枯の
梢はうすき杜の白雪女房ある

「一二」

実教

網代波の色をよりくるひをこ

ひをならぬ木の葉もともに
なかれきてよるゝさむき吹おろす

瀬々のあしろ木

たきそへよ網代のかゝり
かすかにてよりくるひをも

波にわかれぬ

里の名をわか身に知て

この比はの夜さむをうちの

網代もるらん

埋火

更行ふきおこすはうへより消て

をのつから灰のそこなるかきおこす火の

灰灰のつみ火にうもるたたくしき

花鳥の色音はしらす

埋火にむかふかうちは

春のころをよ

をきつきてふきおこすとや

すさまじき扇もならず

埋火のもと

暁恋

つれなさをならはぬ程は

月をたの名にたてもたてけるけりな

有明の空

おもかけはのこる物から

したひみし夢もわかるゝ

横雲のそら

かへるさをしたふならひの

有明につらきたくひと

みる月もうし

「一三」

実教

九月尽

いたつらに今日をくらして

あすもありと思ふかうちは

秋もつきぬる

あすみんともありと今日くわしては又はみさりし

あらしにの野山の秋も

つぬ今日につきにくれぬる

たつた山梢の秋も

吹つくす今日のあらしに

のこる色なき

田家雨

もりあかす門おくて田のいなは

うちなひきむら雨さむききほおふ

秋の朝かせ

ふる雨におつる雫も

をのつからいな葉をつたふ

小田の庵哉

今日愚詠候。御添削頼為

置之段者返置候。先刻参上候

処、御参 内之由承候間、
罷歸候。互相も御他行之由
承候間、不違参上候。清書
明日にも苦間敷候哉。宜
願之心得候也。

実教

〔一四〕

林雪

実教

風風まよふはらふ雲のはやしは
くも曇もなくはれて梢ふりいてに雪の
つもると花にまかへるもなし

明林の木々にそむる木々のはやしに

雪こいかしもみえてささむけしもはく小鳥の

声さばく声くもさむけし

〔一五〕

寛永六年名月

実教

名月

ななにめて、月かけこよひ
なかむれはなをしもいと秋になる

さやけさそらのそら

月かけをこよひさやかに

おもひぬるいま夜と見しに

秋のそらかな

〔一六〕

寛永十三

実教

七夕

天の河ほしのけふといへはのあふせを待まえつゝ

風もしつかに波もさはらし

今日といへは浪もしつかに天の河

ほしとのあふせの道とをなすらん

織女とのあふせしられてをのつから

風も涼しきけふの夕暮

天つ空に猶すゝしさを吹そへよ

ほしの手向を風もおもはゝ

風もなを暮行空の涼しさは

星とのたむけを思ふなるらむ

行星あひの道ともなるや天つたせにの川

引わたすけふの雲のうき橋

めぐり逢星の為にし引わたす

色もめつらし雲のうきはし

さく花を折ならへつゝめつらしき
色よりやまつほしに手むけん
をく露の色をちらさず咲花を

おらてそのまゝほしにたむくる

神の代の契りやふかきとし／＼に

一夜はたえぬ星合の空

星合の手向を思ふ色みえて

なひく尾花に露も置そふ

手むけとてたくいろ／＼の薫物を

匂ひあまたにほしもうけなん

暮ゆけは猶たむけをそ思ふなる

ほしのおふせの時を待つゝ

天の川手向の数にもらすなよ

かきなかすもしの色あさくとも

「一七」

寛永十三九月六日家ニテ月次当座

実条公出題也。

実教

なとほとゝきす

＼待えてもなと郭公

一声のなのりはかりに

過〇行もうし

里なれぬ程にはあらて
わりなくもなと郭公
一声の空

かたへすゝしき

＼暮／＼て猶かたへ涼しき

河なみをもとめより／＼つゝ

夏はらへしつ

もとめよる河せに

風のたえやらてかたへ涼しき

夏はらへかな

「一八」

寛永十三重陽

実教

菊

をく露や八重咲にほふ

菊の花も九かさねに

けふはなすらん

けふをたゝ菊のさかりに

契をきて色かもふかく

咲にほふかな

「一九」

寛永十三

実教

九月十三夜

／＼過にける名におふ空も

はるゝまでこよひの月の

影のさやけささえてゆく

大空天つ空は千里も晴て

長月の名におふ月に

雲そかゝらぬ

〔二〇〕

寛永十三十月廿九日家会月次○兼日也

実教

霰

／＼降過る跡よりは又

曇にきて時雨○つきせぬ

雲申方のままもわりなし

吹風のいかにかつ時雨つゝ

ゆく雲もかさなる末の

空ははれせし

浮雲のたゝ一むらも

山風の吹めくる空は

四方の時雨か

鴛

さえ／＼て鴛上毛にの毛衣

をのつから霜をかさぬる

色もめつらしをみすらん

／＼うちはらふ羽音はたかくもしけく

池をしよりののをしの霜かふき夜そは

声わきてしらるゝのかす／＼

暮わきてしらるゝより先池の玉藻のうき草の

床つかひはなれぬしめて汀つになるゝ

を声かなしのもろ声

書

／＼まほりある神にまかせて

敷島道わの代々のをしへの

文をつとめむ

すり契あるなかつ硯の水を

たよりにて文の色をは

筆理きてやしるやみすらん

すてをかす字いく度もみて

をのつから代々の文をは

しみにまかせし

あつめをきし文代々のをしへはを学て

しきしまの道のみならぬの光も

世水草の跡にやせらせん

〔一一〕

実教

けふははや別れゆくとも
郭公聞てなれぬる

声は忘れし

／＼忘れめや別れ行とも

ほととぎす旅ねになれし

声のなこりは

／＼陰たかく／猶やしけらむ

若竹のみとりの色は

千世もかはらして

〔一二〕

実教

九月十三夜

長月の名はかひなしと

見るかうちに時雨をさそふ

月のうき雲

染いたす紅葉の木々も

恨みあれや又名にたかき

月のしくれを

〔一三〕

実教

聖師法業
滝氷

こきちらす岩ねにひろへ

亀の尾の山風こほる

たきのしら玉

音なしの山かせさむみ

思ひせく心の滝を

こほりにそみる

梅有喜色

咲にほふ梅もさかゆく

家のかせふたつの道の

光そふらし

さく梅の花もくもらぬ

玉くしけ二のみちの

光そふらし

〔一四〕

実教

瞿麦

夏ふ●●草の籠の
いたつらにしけるか中の

なてしこは秋さく花の

しるへとや見む

なてしこは秋まつ花の

しるへとやこの夏草の

秋をまたなむ
中にさくらむ

咲いてん秋の千種の

しるへともこのなてしこの

花をこそみめ

秋をまつ花のちくさの

しるへにもこのなてしこや

ひとりさくらん

秋まちてさくらん花の

しるへともみる色ふかき

山となてしこ

たくひなき花にも有かな

しけりゆく草の籬の

山となてしこ

花にのみ色かはりゆく

しら露の草はみとりの

山となてしこ

もろこしにさくともよしや

あし引の山となてしこ

尋てをみん

とこ夏に花をみよとや

霜のちちまて

足引の山となてしこ野も山も行てたにみん

宿にさかすは

第三の 花にさくとも
初霧のしに さかすは有とも
行結句 行てたにみむ

「二五」

実教

秋依月勝

さひしさもなくさむ道も

わきてそふ秋の光は

月にやあむらん

秋はた、秋を契りて

すむ月に身にしむ色の

わきてそひゆく

初雁似字

忘れすや故郷人の

ことこの葉をかく跡見せて

雁は来にけり

天つかりむすひもやらぬ

玉章をかけてきぬると

水くきの跡」

行水にかすかく跡か

霧のうへに初かり金の

きゆる姿は

隔一夜恋

一夜をもつらきへたてと
へたてとて一夜なからも

うらむ世絶間かちなる

中もある世

此まゝ又へたてすは

人心一夜はよしや

うつりゆくとも

●● 故八条宮試筆

フミ●●テハ遠き程シル東路ヲ

イカニ一ヨニ春ハキヌラン

江戸へ下向ノ次ノ年也。

(以下、複数の斜線を文字上に引く。抹消のためか)

寛永十六八十五日

江戸より飛脚此十一日江戸へ帰

右中ノ書申来。

「二六」

実教

菊映月

にほへ猶空行月も色そへて

ちらす光を花のしら菊

月はまつの名におふ影も月はあらはれては先

こよひあらはす菊のうへかな

菊帶露

置とめて露さへきくの花の上に
宮の内はあらしもよそにきくの露

ちるといふことをしらすかほなる

一とせの花のかきりと
ちらすなよ此花までと菊の上に

めくみの露をもくみえても

菊似霜

にほふより花にわかる、をあらはす白菊や

しみつく色の霜にまかへととみえても

日影さすかきねにとくる色なきは

花を忘るゝ霜のしらきく

山路菊

咲にほふ菊の山路よ仙人の

すみかといふもこゝにや有らん

山風につきぬにほひをしほりにて

菊に分入末もまよはし

河辺菊

大井川うつれる山のつらき名も」

汀にの菊のしらてにほへる

ちりつもる露の行ふははさなからきくの花

此谷川の
下行川のの水の水かみ

寄菊契

たのめをく中は未をかはるなかはらしうへてみる
菊は花ちる世にしあふとも
かはるらしななよむかふ籬にさくきくの
露へたてもへたてすなく契る行ゑは

々々恨

色見しれかしなえよふちと成ゆくしらすきくの
露をころにつもるうらみは
うつれなしやつろふは霜をきまよふ菊ならて
人の心のしりかほるほにみるもうらめし

々々旅

草枕露さく花はのやとりも故郷の
秋をへたてすにほふしら菊
やとりとる野はさく菊の一もとに
みなからにほふ草枕かな

々々祝

吹上はま風もや真砂を君か世のかすに
契り吹上のきやく吹をかそへんて菊もにほふ浜風
君いく世みんそみんけふ九重にうつしうへて
山路のきくを雲るはるかに

「二七」

夏朝

明はれくやすき夜の恨は
残りなく残る月のこる
影月の朝風のすゝしさ

茂あふ

青葉を分る風のすゝしさ

「二八」

菊映月

にほへ猶空行月のも色そへて
ちらす光もを花のしら菊
月長月の名におふ影も月はまつはまつ長月の名の光をも
今夜あらはす菊のうへかな

々々帯露

置とめて露さへ菊の花の上に
ちるといふことをしらすかほなる
ちらすさく花はなよ此花一とせの花のかきりとまでときくの上に
めくみの露もをもく見えても
露露のめくみもあつて色かなのめくみもあつて色かな

々々似霜

日影さすかきねしとくる色みをはにほふ色はたゝ
つれなくとけぬ霜のしら菊
にほふより花をあらはすにわかるゝしら菊や
しみつく霜出の霜と見えてもの色にまかへと

山路々

山風につきぬ匂ひをしほりにて

分入末もさけるしら菊か（マユ）
菊に分入末もまよはし

咲にほふ菊の山路や仙人の

すみかもこゝにへたてなからん（マユ）

河辺々

ちりつもる露はさながら谷川の（マユ）
此谷川の

菊の下水の水かみ（マユ）
下行川の

大井川うつれる山のつらき名も

汀の菊のしらてにほへる

寄々契

たのめをく末をかほすなうへてみる（マユ）
中津

菊は花ちる世にしあふかも（マユ）
まかきのきくは

かはるなよ籬にほふしら菊の（マユ）
むかまかき

露へたてなく〇契る行あは（マユ）
むすぶ

々々恨

色みえよ菊の下露それならて（マユ）
しれかしなふちとなりゆく

ふちをこゝろにつもるうらみ（マユ）
うらめし

霜まよふ菊もわりなうつりゆく（マユ）
うらめし

心の花のうらみある身は（マユ）
人心

（以下、文字上にまばらに斜線を引く。抹消のためか）

々々旅

草枕露のやとりも故郷の（マユ）
秋のきく

秋をへたてぬ花のしら菊（マユ）
花は都の庭にかはらぬ

おき出る名残露けしさく菊の（マユ）
やとりけるのはさく菊の一もとに

みなからにほふ草枕かな（マユ）
一もとにほふ野へのかりふし

やとりとる草の枕もさくきくの（マユ）
花

一もとゆへにほふ野へかな

々々祝

君そみんけふ九重にうつしうへて

山路のきくを雲井はるかに

吹上や真砂を君か代の数に（マユ）
秋風も

菊もちきりてにほふ浜風

吹上のきくに契る行末（マユ）
の秋をかそへん

「二九」

山初秋

風の音のまつひやゝかに

をとほ山また入たゝぬ

秋の色かな

末つみにさそはんもうし

山の名の青葉の木々の

秋の初風

霧間草花

木の間もる月にならひて

霧はまよふ秋の、花野はの

心つくしは

隔すつれとあらはれ初るはる」

花の色に絶間みゆるはしるき

野への秋きり

〔三〇〕

実教

初冬時雨

雲くもさそふ山風かぜあらし今朝けさよりは

神無月かみなしつきとや時雨ときりきぬらん

河上落葉

木きからしのまなくふきおろす山河がは

紅葉もみぢをはしにわたす●む

立田川たちだがわなかれもあへぬ紅葉もみぢはは風かぜのかけたる水みづのうきはし

残菊

吹ふはらふ風かぜやみねにたつた川が

紅葉もみぢをはしにわたす比かな

くれなみの千しほならなん山風やまかぜの

紅葉もみぢをなかす末すえの河がなみ

行ゆてみん道みちとくとも紅葉もみぢ々々のまなくなかる、水みづの水上の上

とをくとも行ゆてをみはや紅葉もみぢ々々のまなくなかる、水みづの水上の上

残菊

つれなくも残のこれる秋あきの菊きくなれや冬ふゆかれはつる草くさの籬かきに

色いろも香かほも猶なほめつらしな秋あきよりは秋あきなき時ときの岸きしの白菊しろきく

百草ひゃくそうは跡あとなき庭にわに菊きくひとり残のこれは残のこる園のちの内かな

霜しもに今いま猶なほめつらしき菊きくはた、秋あきなき時ときをのか秋あきかも

池水始氷

かれはてぬ一ひともとときくの影かげもまた

へたてすこほる大沢おほしづみの池

あつくなる夜よをやかさねん池水いけみづに

それかとはかりむすふ氷こほりりも

○ひとりすむをのか友ともとや水みづとりの「

かけをへたて、こほる池水

野寒草

嶺の雪ゆきふりつむならしやたの野のは

あさちもさむくかれわたる比ひ

かきりなく嶺のには雪ゆきのつもるらし

やたの、あさちかれはつる比ひ

暁霜

月つきは空や光ひかりおさまる有明あきにしろきは霜しもの真砂まじ成なりけり

冬月

くまもなくはる、●の花紅葉はなもみぢ分ぶんしは夢ゆめか冬ふゆのよの月つき

花紅葉はなもみぢ分ぶんしは夢ゆめか冬ふゆのよの月つきをみる哉や

山家冬朝

たき添て煙にそむせふ明山かけやほのや霜朝霜しめるもはらはぬ山松の下柴

折たくを先さむからし朝しとや今朝の朝けあけの霜うちはらふ山の下柴

冬夜恋

たへていもかわれ
いかて身のひとりねなむ水池のをしもとりもつかひはなれすなるゝ霜夜を
よにみてなきあがせや油のをしも

冬祝

此比の霜にもたへてみどりなる松と竹とは千世のかけかも

君か代に山となるへきちりひちも

さそなと見すよや雪のつもるを

「三一」

実教

三月三日

暮やらぬ花の光に

三月の影さへにほふ

桃のした陰

今も世に名のみなかれて

けふといへは心にうかふ

花のさかつき

月下虫

あさちはらうらかれもなき

月影の霜さむからぬ

虫のこゑ

出ぬまは

三月三日

月下虫

鞆中恋

今も世に名のみなかれてけふといへは

こゝろにうかふ桃のさか月

あさちはらうらかれしらて月影の

霜さむからぬ虫のこゑ

たひ衣いくうみ山をこえきても

心へたてぬ中かはらし

「三二」

実教

菊映月

にはへ猶空行月も色そへて

ちらす光を花のしら菊

長月月はまつの名におふ影も今宵あらはしてまつ

菊今宵のきくの花にうつろふにあらはす月の色かな

菊帶露

置宮の内はあらしもよそにきくの露とめて露さへ菊の花の上に

ちるといふことをしらすかほなる

さく花ちらすな花のかきりとは此はなまてと菊の上に

めくみの露のをもくみえてももあつき色かな

菊似霜

にほふより花にわかるゝ白菊や
しみつく色の霜とみえても

日影さすかきねにとくる色なきは
花を忘るゝ霜のしら菊

山路菊

咲にほふ菊の山路よ仙人の

すみかといふもこゝにや有らん

山風につきぬ匂ひをしほりにて

きくに分入末もまよはし

河辺菊

大井川うつれ山はあらしの
しらてはほへる

散つもる露はさなからきくの花」

下行川此谷川の水の水かみ

寄菊契

たのめをく末をかはるなうへてみる

菊は花ちる世にしあふとも

かはるなよむかふ離にさくきくの

露もへたてす契る行ゑは

々々恨

うつろふは霜をきまよふ菊ならて

人の心にみるもうらめし

しるやいかにふちと成ゆく白菊の

露をこゝろにつもる恨みは

々々旅

さく花はかりねの野へも故郷の

秋をへたてすにほふ白菊

やとりとる野はさく菊の一もとに

みなからにほふ草枕哉

々々祝

吹上や真砂を君か世のかすに

契りて菊もにほふ浜風

君そみん山路の菊もうつしうへて

けふ九重の雲あはるかに

「三三」

実教

花

名残なくなみ木の

さくらちりゆけと御はしの花の

猶さかりなる

朝たつも夕ゐる雲も

そのまゝにこりゐる嶺は

花さかりかも

氷

池ひろみみきはもとをく

こほる也今いくよあらは

とちやはてなん

立かへりこほるそはやき

春風にとけしはちかき

水のしら波

「三四」

実教

顯恋

思ひとけはせめてうき身を

わかうへはおもふにせめてよしや身の

なくさむやくもりなくても

名にはたつ世を

かきりあれば松を心の

袖の上もしくるゝ木々の

いろに成ゆく

色に出る涙の袖よ

時雨ゆく秋の木のはゝ

誰かとかめし

「三五」

実教

遅日

花をみて筆にまかすことの葉の

つもるに長き〇日影をそしる

雲雀

吹のほる風の木の葉の色なれや

声さへそらにかすむひはりは

漁舟

こき出る磯のみるめもかりとるや

いとまなきてふあまの釣舟

窓梅

しらみゆくひまより風のさそひきて

梅かゝにほふ窓の明ほの

郭公稀

里なれぬ比にかはりてほとゝきす

日かすふるよりとをさかりゆく

寄鳥恋

へたてある思ひはしらす山とりの

したりおなかき契りともかな

夏山

春秋の〇にしきの木々も時しあれば

みとりになひく四方の山のは

夏鳥

月のためあけて更ゆく真木の戸は

たゝく水鶏を人にまかはぬ

夏恋

せめて身の思ひももれようちいて、
もゆる蛭は人もしるなり

夏草

生そふは茂り合たる夏野にも

春を忘れぬ草の色かな

聞恋

みる人のかたる言葉をたよりにて

先面影の立やそふらん

懷旧

くれ竹のすくなるを猶忍ふなり

程は雲ゐのすきし代々をも

尺教

あふけ猶後の世かけてをしふるは

御法の道の外にやはある

「三六」

実教

荻近枕

余分も入候は
此分可然候

さひしさは夕もあれと

夢さむる枕にかよふ

萩の上風

軒ちかみさめゆく夢の

まくらには萩ふく風や

鳥の初声

社頭榊

今朝のあさけ此神垣も

白妙にゆふかけわたす

霜の榊葉

宮人もかをかくはしみ

神垣になひく榊を

おりやかさゝむ

頓而還幸之沙汰候間、

其御心得可被成由、可令申給候。」

朝董 兵部卿宮

野へにけさむらさきふかくさく色も

あかぬすみれの花やつまゝし

昨夜者御賢慮畏存候。其節之

詠草、先存寄書付候間、入御覽候。

宜御添削希存候。已上

正月十八日

中院殿

公福

【資料番号 八四五】

「一」

寛永十六五十七 禁中 御月次

実教

夏暁月

／＼秋^{の夜も}とても限はあれと

まちいて、程なくしらむ

月は^{をしとむもふ}うらめし

夜の雲^{きえつくして}残らぬ月も

明やすき恨ははれぬ

しの、めの空^月

杜夏草

／＼木ふかくてあつき日影を

へたつれば、露^つもかはかぬ

森の下草

露しつく森の下草」

しけるより木々のみとりも

わかぬ色^{色にかはらぬ}かな

古渡雨

／＼立よらむやとりしあらは

降雨をさの、渡に

さ^{いまも}のみいとほし

波^{波の音に}かきくもり雨もわりなく

降くるや行末^{くれてさひしき}いそく

宇治のわたりに

行末^{よと}を猶いそくなり

かきくもり降くる雨^をの

宇治のわたりは^に

「一」

寛永十六五八 仙洞 御当座

実教^上

雨中早苗

／＼ふしたつと此一むらは

五月雨の晴間もまたて

早苗をそとる

山川のあさきなかれを

●●は雨をまちえて

さなへとる也

俄初逢恋

おもひよらぬえにし有より

かならずと末をちきるは

世にさためなき

／＼此^{此所院御定也}ゆふへたのみそめても

前の世のちきりはしら^む

夜はの手枕

〔三〕

寛永十六三廿四日 公宴御当座

実教

窓梅

／＼しましらむ光と、ももに
しらみゆくひまより風の

さく花をちらさぬ

にほふなり夜のまにさける
さそひきて梅かゝにほふ

窓の、明ほの

雪の色にとちたる方は

さく梅の匂ひもさむき

窓の内かな

春来ても雪にとちたる

山まとはさく梅かゝの

にほふ寒けさ

郭公稀

／＼里なれぬ比にかはりて

ほとゝきす日かすふるより

とをさかりゆく

立帰りになきふるしてし

声を又忍ふにゝたる

ほとゝきすかな

寄鳥恋

／＼へたてある思ひはしらす

山とりのしたりお長き

契りともかな

霄のまは忍びやすと

つらき名に立なる鳥の

声もまたるゝ

〔四〕

寛永十六十 院御方 御夢想之御法楽

御夢想之哥

さく菊の山路は人にめかれせぬ

さかりも千世の秋を契りて

実教

待恋

よしや猶更過るとも

とへかしなつらゝさを人に

せめてかこたむ

／＼よゐのまは忍ひもやす

契りしにかはるつらさは

更てしられん

夜をへても人はつれなき

真木の戸にまたれぬ月の
影そさし入

〔五〕

寛永十五十一廿四 禁御月次御当座

実教

春欲暮

／＼とし／＼にかへらすは猶

つれなしと春のくるゝを

世にやうらみむ

かひなしや今いくかありと

かそへつゝ残りすくなき

春をしたふは

哥定候。猶同字等可有吟味也。

もし余分入候者、奥ノヲ其まゝ

可被用候也。

〔六〕

実教

野春雨

／＼みとりそふ都のゝへの

雨のうちや深山の松も

雪まみゆらし

つれもなき花もやさかん

きのふけふふる野の雨の
あすも晴すは

田家路

／＼時は今としるや門田に

せく賤もなはしろ水の

道しある世を

／＼守人の往来そさすか

絶やらぬかり残す田の

あせのほそ道

順集

五月五日庭に馬をひかせてみる

●かこまのときもみるへくあやめ草ひかぬさきにそ

〔七〕

実教

池藤

紫の色しらむより

とし／＼にふちなみまさる

庭の池水

〔八〕

寛永廿一三月廿四 公宴月次

出題飛鳥井相公。和哥奉行之事、先月

被仰出、再三御理雖申入、不被免、以中院
大納言通村卿被仰出了。依当月ヨリ、予
令沙汰了。

実教

池藤

になくならひもあれな
もなかはやまたん

＼春のうちはしるてもまたし

ほとゝきすいつかといひしまぢ

花はさきけり

未ひたす浪のあやにも

おる袖のおなし色みる

池の藤かえ

さく花の陰さす舟の

あけの色をうはひてにほふ

池の藤波

暮春

＼残る色もありあけの月の

山のはに跡なき花や」

夢の面かけ

行春くれゆくをおしむはかりは

われ人にをとらんと思ふやほ

恨みせのおもはんやはある

待恋

＼月はさそ待らん人の

よひ／＼にをしはかるへきりても

心とほしともやなきおもひ

さ夜更て時よく成ぬ

とはかりをはしのはん方に

つけもやはらはや

「九」

寛永廿一二月十三日夜 当座十首

侍従為稽古也。予出題。

霞萩氷

降つゆつみし雪の高根の

あさくもり春とはかりに

立かすみかなも

たつ田姫先をりいたす

一むらの秋のにしきは

庭の萩原

秋のにしきをりいたすしてや

たつた姫まつ一むらの

庭の真萩に

のへのへ

風かぜさゆる小川のなかれ行駒のりの

むきむき

くたくあとより又こほりつゝ、

〔一〇〕

寛永十八々廿五日、陽明前殿夢想法楽如例。

中院重相合談合清書了。奥哥直者

予付之、被申所者重相也。

実教

見花

うつつうへて春のさかりは

みても又々もみきりの

花になれゆく

うつるなよとはかり契る

そのほかに物やは思ふ

花にむかひて」

新秋露

通村

黎民のうくるめくみも秋のくる

門田の稲の露やみすらん

例よりも袖そ涼しきおき出る

此朝露をしらせてに秋やきぬらん

〔一一〕

寛永十八七七公宴 出題飛鳥井三位雅章。

愚詠中院重相二談合題。則被定。奥之哥、広橋大納言二兼賢

遣了。此中所勞之故思案難成由二而、内々被望、使則

息之弁也。則今日院参之道ニヨリテ彼亭へ罷出、此

詠草ヲ令見処、勿論所遣之愚哥、端二首共

被写留。

実教

七夕瑤琴

けふさらに聞しにもあらぬ

琴の音はほしの手向に

ねをつくすらむ

糸竹のけふの手向は

琴のねにことみなつきぬ

星合の空

ほしあひの夜を待いて、

ひく琴のしらへにかよふ

天の河かせ

〔一二〕

寛永十八七三於広橋石舟亭当座

予并日野西光氏、三人也。此兩人稽古ニ被読

トテ、予ヲモカタラハレテ則予ニ読合也。短冊

ニカクニ不及。

実教

萩露

秋の色はまた入たゝぬ

真はき原露ふかゝれや

花に咲けり

枝なからよしやみよとは

いかにそととる手にもろき

萩のうへの露

忍恋

くちゆくや谷の埋木

それならて涙の袖も

人にしられず

つたへてもちらはいかにと

まよふこそ忍ふあまりに

露のことの葉

「一三」

寛永十八二十七日公宴御月次

竹門良恕談合申了。

中院大納言通村同端被定。

実教

連峯霞

＼朝夕の春の霞よ

へたてゆく峯はいくへの

限りありても

嶺つゝきこえ行雲も

春きてはそなたの山と

みえてかすめる

春夕雨

＼秋をゝきて露けき袖よ

つれ／＼のなかめにくるゝ

春の夕は

鐘の音はをくれにけりな

またきより雨にくれぬる」

春の夕は

答言恋

＼聞しらてかくとかめすは

かひもあらし恨みを人に

いひかすめても

何ならぬこと葉の末を

さしもやは思ふか中は

きゝもとかめし

「一四」

寛永十八二公宴御月次

中院大納言談合

実教

連峯霞

＼朝夕の春のかすみよ

へたてゆく嶺はいくへの

かきりあり／＼ても

峯つゝきこえゆく雲も

春きてはそなたの山と

みえてかすめる

春夕雨

＼秋もあれと露けき袖よ

つれ／＼のなかめにくるゝ

春の夕は

鐘の音はをくれにけりな

またきより雨にくれぬる」

春のゆふへは

答言恋

＼聞しらてかくとかめすは

かひもあらし恨みを人に

いひかすめても

何ならぬこと葉の末を

さしもやは思ふか中は

聞もとかめし

わりなくも聞とかむるや

あらぬ事にいひまかへたる

とはすかたりを

「一五」

寛永十八正廿五於曼殊院宮良恕当座、予

始而出座、依端哥寄祝義読了。

実教

款冬

＼春もくるゝ名残をとひて

此宿にいく世かもみむ

山吹のはな

越ゆかはかひもあらしと

夕くれの春のまかきや

山ふきの花

羈旅

＼おさまれる世にはいなかの

野も山も都におなし

往来とをしれ

鳥か音も聞し物かは」

草枕ふる郷とをく

おき出る空

「一六」

寛永七十一月廿五日家ニテ

実教

禁庭雪

冬きては雪こそ花とちりかゝる

みはしのさくら春もまたれす

故郷々

故郷はちりしくまゝに落葉をも

はらはぬうへに雪のつもれる

まぢかくも時雨あられの故郷に

ふりかはりぬる雪の寒けさ

昨日こそ木々の木の葉はふるさとの

うつもれかはる今朝の雪哉

山家々

稀に聞都のつてを松にふく

あらしも雪にたえてさひしき

野亭々

雪に今くまなくはれて残りけり

花野をかこふ秋のやとりも

雪に今くまなかりけり秋の野の

社頭々

住吉や神しまもれのねかひをも

松にそかくる雪の白ゆふ

古寺々

聞なれし鐘のひきはさすかなを

うつもれやらぬ雪のふる寺

雪中恋人

とへかしとふりつむまゝに思ひやる

心の道は雪もうつます

々々述懐

老らくはよそに聞身もなからへは

ふりゆかましと雪をやはみぬ

心あるは昔にも似す物ことの

道もふりぬと雪をなかめむ

々々遠望

わたつうみや雪をのせつゝ行舟は

おきつ塩あひのあはとみえけり

駒とめておなし心に雪の内は

袖うちはらふ旅の友人

「一七」

寛永十七九月九禁裏御会

実教

籬菊露芳

けふむす露のまかきには

千世もへむ山路へたてす

にほふしら菊

けふといへは庭も籬も

さくきくの匂ひをちらす

露の秋かせ

「一八」

寛永十七八

実教

名月

いつのためと秋のなかはの

夜をかけて月の桂を

雨はそむらむ

／＼さすか又ふるは晴ても

あま雲の絶間はさらに

なか空の月

「一九」

寛永十七七廿四 公宴御当座 奉行

西園寺大納言、藤谷宰相也。但西園寺

代也平松三位也。

実教

七夕雨

けふの雨をおもふに

天の川水をあさ瀬になれと

せきくたすらん

天川かへるへき瀬を

おもふにより水よりまされとて

雨はふるらん

野径月

青のまとうかれ出ても月ははや
あくかれてゆく／＼月のふくるをも

おほえす●●野へのはるけさ

末とをく分つくしても長きよは

かたふきはてぬのへの月影

「二〇」

寛永十七七廿一日○アル久夢想勸進

実教

花錦

程もなくをりいたしてや

さく花のにしきをたゝむ

遠近の山

／＼ほのかにも花の錦を

たちおほふ雲も霞も

はれさらめやは

田家

／＼待えてや思ふ／＼にかなふ

秋の田のたのみもふかく

もる庵りかな

ますらおかもる声／＼も

うちなひき稲葉にかよふ

小田の秋風

〔二一〕

寛永十六十一廿四 公宴御当座五十首

出題飛鳥井中将

実教

不逢恋

つれなきはわかづらかりし

むくみかたとたゝ前の世の

身をうらむ也是はありさうに
覚候

物ことに限りある世の

外なれや思ひよはらぬ

人のつらさは

難忘恋

したふなる身をうら風に

吹よせよ人わすれ貝

ひろひ初てむならはん

忘れすよさすか見なれし

面かけの立そふまゝに

心よはく身をはなれなて

〔二二〕

寛永十六十一十七 禁裏御月次 出題飛鳥井中将

実教

雪中残雁

名残ありて春もいそかすかへるをいそかてゆきし
かりなれて雁

行雁やをくれて雪の

空にきぬらむにけり

故郷の秋を見すてぬ

雁なれやをくれて雪の

そらにきにけり

冬かけてつゐにきにけりをくれし雁は

秋の雁うちゝる雪をかへるなり

花のみやこに

雪埋苔径

苔の上は春みし野へのもえ出し草の

面かけにふむ跡あをき今朝のしら雪

雪のかよひち

塵もなくみえて玉しく

雪の上にとふ跡つらき

苔のかよひち

とはれぬと跡なき苔に

みえてうきうらみもうつむ

庭のしら雪

海辺松雪

さえあれてをのれ吹まく

浦かせははらへとたまるふかひなき

雪松の雪かなの松はら

／＼住のえの松につもるはよせぬ

沖つなみかけてかへらぬ

色の雪かな

よる浪のかへらぬとみむ

梓弓いそへの松に

雪のつもるを

／＼影みえてつもらぬ浪もほ白妙にけりの／＼と

雪より／＼しらむうき島の松

〔二三〕

寛永十七六月廿四 禁中御当座

合点 墨付候兩首同字、能々

可有御覽候。

実教

郭公 ／＼したへともかたらふ夜は、
明ほの山ほととぎす
聴ている也

忍音をもちさしとてや

鳴いつる山ほととぎすしのひきは初の事にて候

声の夜ふかさ

とし／＼にいかになくと

ほととぎす又めつらしき聞しも恨め

声をとほしや

夏月

／＼名にたちて明やすきよの

月はた光おさまるしらめる

／＼空かけまでをみん

涼しさもみる程なさも」

一とせにたくひは夏の

月のかけかもな

〔二四〕

寛永十六六廿四 公宴御当座

実教

草庵月

／＼むら雨のすくる跡より

月影の露あらはするなからもる

草の庵哉

さく花もかこひなしつゝ

草の庵は月を友なる

秋のよな／＼

時雨告冬

／＼したひえぬ秋は秋に別し○きのふの秋の

うき雲も冬今朝はしくれてをしらせて

時雨冬そしらるゝきぬらん

晴くもりしくれ／＼て

天津空けふそ冬たつ
日影をもしる

河水」

夜をへては音もはるかに
こほるなり○河風ちかきさむき

水のしら波

つもりぬるおち葉木のによとむ

谷川のほそきなかれそ

まつ氷りゆく

寄杜恋

色秋になるふかき森の梢を
心にてつれなき中の

○うつり行らん

立よればうき名のみたゝ

程もなくもりの雫に

袖そかはかぬ

「二五」

寛永十六五廿四 公宴御月次御当座

出題飛鳥井
中将 巻頭竹門新宮

実教

三月三日

くれやらぬ花の光に

三日月の影にほふもあかぬさへにほふ
桃水のした陰

今も世に名のみなかれて

けふといへは心にうかふ

花桃のさか月

月下虫

あさちはらうらかれもなき

月影の霜をむかふるさむからぬ

むしの声く

出ぬ間は心つくしに

松むしのかたふく月を

又うらむ也

鞆中恋

分まよふ野山の露の

かはくまも思にはなきひある身の

袖をみせはやそひかたき

遠人はたさかる都をしたふ

涙心よりかなみたかはかぬ袖と

人は思袖とみるはむ

旅衣いく海山を

こえきても心へたてぬ

中はかはらし